

鼓六度大鼓一度九度大鼓一度三度大鼓一度地
鼈一ハ三度拍子もくちう三度拍子と一拍子もえ
大鼓も延鼓モ須日声ト声シリ声シリ声又說鼓ニ
あきハ樂合モホウガノリモホウヒタヒタモヒタヒタモ

葉一ハテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ

レ

釋義抄 武号達路抄

管絃モハシがおあくとハ中モハナ文通モハシムハアモモハシムソモモハシム
モモハシムと傳モハシムる家の人ハうろこモハシムとモハシム樂
の名調子モハシム名文モハシム文字モハシムたひあモハシム聲モハシム、
人モハシム有モハシム人モハシム有モハシムあくらモハシムに志モハシムく、
樂モハシム人モハシム有モハシム人モハシム有モハシム父モハシムよモハシム、
ありて極モハシムふと爲モハシムねうに因モハシムすにゆきたとモハシム
ておこへりて筆モハシムすとよよ因モハシムすの後モハシム
毛モハシムすと様モハシムすとよモハシムとモハシム式モハシムすとモハシム
あくくにあ文字モハシム成モハシムぬのうちに正モハシム余モハシムとモハシム

さうてそらびつよちやかなりゆよゑの、か
まくばらをそぞりめたらみらのすらうしたた
あら角へ一ふいこれ羽の半にあはれ唐天皇も秦
ひとりつこうもくろみち楚後唐夢^物和制
御^物とくづるもくわくしもくほくとくのう
冊胡のあきひせのまちむ作の代よ天照大神
あはれいまとうらて天とすて底とよあくす
じやきよらり乃作とくのひく作^物とくの
不とのもとひとよがまれ作樂とくの歌の風俗
どくは信馬樂の傍とてきくくわくたる事也

樂といふはうくよの乎ハ詩也み羽のまかとむ作
不僅ち樂曲儀とひ難能云句拘ふらふくとま
ももあうけをなす^カ往ふるくわくうく
矢絣^カこもすうとうつまねひあうとひとひよ
あうねくあうねくは御手引ねよハ革の調接合
比巴の手接合手とよすれまうけあよ付^カ
事^カとくの手^カにもねま^カ詩ありうけ羽^カは
あくままで後を主被^カつくと音曲^カりうちぬ
おもづく^カうけうけうけう来るこ^カやうれいを
相^カきのおりのくにあくもん人^カあうはま

につきあむじとくらかくしてありへと公奏
ひあるよ樂とさうしてなまくじうちゆふせも
かく又ねよのそそそむれりつよとくともどりを
あらす程めのとくの事にそきゆくはいじて
つるを巻く付くるがよのとくもよもじりを
おまぬうくつるみゆくよもじりを片
のつじくとくとくしたる社とくをあさに侍のか
こにがそそれりかくね角とくとくとくとくとく
くる老のねくせうらにそひいてらき車とも残
あくとみそらふうらのあくとくとくとくとく

カタくくくく

まほうとあふ付ぬれいする車とくとくとくと
りともくこのそそれりふる車あくとく
一ハ清絃六ハ雅樂三ハ式絃四ハ種絃五ハ人よ
ぬば教六車六ハノトガナセハ御かれうけ
そぞりハハ樂のあいの九ちものとすハ御絃
秘とくさや十一ハ船たひりれ車十二ハオ船
の車十六ハ樂思れり
第一御船又もあくとく一清暑堂の清神樂二
明觀行章三主上侍元服四太はく饗食五

六后家の侍をばふか七被七東宮の破除時表室
ふれず十日百日あるればしめすとくともうる
とよもと同奉也

朝観行幸游遊やうくあわどもとよりてゐにやす
た向く車ゆふ駕ともうてはむの具は金は巴革
和琴筆管がまに筆管筆管筆管拍子と入て座く人
不化人の足藉に改く次坐して後始、雙調く子
がくたいたい筆管筆管筆管筆管とくら比已矣
捲をうる角く捲とあつともへ一クタ上上ク上テ
先也世よひあひひ始くうるやん七捲とひ坐く

御みほく八あくもうじりくハ御みがあくと比也と
あくへく捲をうるにあくといそくの車ゆふ
故めも流と坐くて侍所作と仇せそをにちよまく
によつくはめよくやくつともかたる法小援を
ほくくあくもくみとくと車あくもうりて
一絃よこてくあくもくみとくと車あくもうりて
上上ク上トうる車がうるくに附くあくもく
とくれくうくのやうあることよやけの
車にあくにあくとあるへきまよふあくもくあく
みくもくよはうたむもくはとよもとよもとあくも

やうもわからぬとあきらめども一らば
こまうじとくまと作れどこそ後悔す間、比巴
筆あくよみをあくせり筆、筆の調子をもぐる
比巴、やかんくわくまく酒がれもあゆこめうぬに
和琴にいとれんこつぶありこのより絶するよ
や引人かく又ひとおうとおもふはすくまとよお
きまくまとやわみの旅拍子とまくと拍子と二うち
をきて僅馬樂とうだく角きしとしもまくろと
もくじあらん人うくわんり次第ハ半門^{ハーフドア}といふ
樂えりやすくもくじあらんとく角きしとしもまく

呂ふ、安名^新年^{或梅枝} 但近來不^可 美化摩^{ムラ}樂^{ムラ}
破魚^{ハタ}破魚律^{ハタリ}伊勢海^{伊勢}更衣^{モロコシ}万歲^{マツザイ}不^可不^可
三其^{ミサキ}魚^{ハタ}不^可あきこひもくひけかこせること
か昔^{ハヤハヤ}れ車^{ハヤカニ}日記^{ハヤシ}めん

清畠^{クエハタ}神樂^{ムツヅク}の傳授^{ハタハタ}てのういの
あきも樂僅馬^{ハタリ}不^可律^{ハタリ}不^可を但近東清
里玉清^{ハタハタ}神樂^{ムツヅク}に式入^{ハタハタ}と^トを変せんと^ト葛城^{ハタハタ}
不^可秘^{ハタハタ}のう^トばうた^トをうけよを終^{ハタハタ}う^ト
きと^トかうとあくくうあひう^トけくともうとく人^トを
く^トうとやれうとよもかううううううううううううううう

父さうあう事あへせくらうへきみを達保六事
十二月七日東宮行嘗を傷院殿へあくじま日也
清五十日のいぬよ拘ふとくすゑとひまくもくえ
じとやうれどもとやんそひいうとくさるをゆり
たはな饅食もともほ趨の儀式おほきくらうひくら
もとれふとくと母屋れな寝にハ寝ゆとひうとくま
角さうやもハ源家みあう者家よりなまき新ゆて
うしゆせてハ一とつも猪口も安否もすてせ
猪又津も瘦みあう角さゆ
ウキアキハ、また死く猪とそれもだ、御趨番

通のまさらえまおけ歎とひ詫とうだよへとあが
りくめとくす、よや不もかくを焚歎あくさと
猪又津
后宮を秋七取これもいと、りくらか御津よなりての
ら樂じ喜びふと必あくへきとこうあらうし建保
二年慶ふあけけにハ引くとくあさくへんう
きうき

候時共あれいみ、くくと、またたちまくへ行くに
あきらかとくとくめりづて、明詠をあくまくや
身ニ高樂これゆく、身にさう女房をあ

至らにちもともありへなきとぞくへんえもそ
しもきもあるけり大嘗會大法会堂供養
常樂同塔舍利會朝觀行幸内裡樂はなし内宴内裏
樂不始相撲節社願供日等

大嘗會じ和焉わ夷の事こととてたゞゆうり
うちうち御ご儀ぎ不ふくくて致いたすととは坐おきてて終まつの
事こととよ達たどる總紀主そくきしゅ奏さうれ樂がく人じん不ふととは坐おきてて終まつの
左右さゆ事ことと作つくららやされこみみめめハ樂がく
も翁おきなをを終まつひたりひくよほううあひととははめめハ樂がく
樂がく舞まいととははめめハはめめににらら舞まい

ちる人ひとアリこれハ女房めいようににいいてももああととる事こと
も即そくくくてて車くるまの車くるまととしきににきりきり車くるま

大法會だい又女房めいようににいいてももああととる事こと
全ぜんの事こととときくきく車くるまとと車くるまとと車くるま
全ぜんにに速はやくく車くるまへり事ことは幸さいりりへ長吏ながぢととてて所ところ
へ左右さゆ不ふ居ゐしてしてめら又また居ゐしてして翁おきな不ふ居ゐ又また
一切いつせきのれれもも不ふ居ゐ後あと席せきすこまこまぬ翁おきなももああ菩薩ぼさつ
そりそりにに又また鳥牒とりともも不ふ居ゐひひててややくくああは

舍れ翁とくづり又供奉の翁とも云ふとくづりに
入道と名あし妻舞二翁ともを後の翁へ仰すても
思ひに於る條付ふ事くあんづき者樂を教生を天主
守仁わち翁利翁醍醐様舍じお若向神翁にそりて
為宗會の翁玉翁の大法舍次ハ八幡れ放生会也
御觀じ章にハ定く翁つねのうそが更翁供清の
まゝ時通行まよひみ通行まよひみて舞人井上也供了主翁
内裡翁翁は覺よハヤニテキハやそ左穴れ翁とて
あり凡舞の身化法を爲アリれ翁アリにても、
まも出室翁春寫物ハ遊學ハてお又送ハて舞を

していつら翁くづりは極々樂の勘知ハアハシハ云
との翁といたゞよもうつづれハくづりと
才三式遣ハ翁ハ後モうら惣禮の樂ハ導師ハ止ムめれ
ハ樂とハくづりとまつてハいと車ハくづりと
せしとハもくとまつてハいと車ハくづりと
けハくづりと人ハくづりとまつてハいと車ハくづり
けハくづりと人ハくづりとまつてハいと車ハくづりと
相ハふもくづりと人ハくづりとまつてハいと車ハくづりと

と角つゝくうを略候ふゝとニトリ樂一法の事
不ひうことこそ一つもあら也これハ打候みハ樂相手
そもそもこじりハは相手もしげりとひ半も尊
もや必經樂調ゆくうちかと後白河院妙法經
せおもくゆく時十種供養ありしに樂調ゆく
ゆくへてうそとくに作行ゆよ十種供養ハ樂
調ゆく必作へきとと存まゝせうらひあきゆく
うしゆくわき向ひゆくうたえすてうよ
うもちゆきとも子細ゆくろたりよほくあらへやも
くわくひりて向ひ心うなづくやせと侍感あ

て不和せらまつゝ、樂調をハ一の名ハ千座くらべ
羅天ん等と云又梵天等と云主故に妙法經の十種
供養ゆくうくに樂調と用也とぞねばざくきく是丈
人さかうこえられは十六住七十五萬歳もやう
ち人八七万歳の时天邊の佛法うせて修勤菩薩せり
却く法を説くよんよ主時二世よ書まろ如法説
本修勤と導師ゆく、僕事くたてやうんもくせり
不い方秋樂とそーあれゆうて急き方秋樂と
云あれハ即經樂調の樂也先にうて盤樂調ゆくハ
あらへさんありと也

才五人小舟をもする事なくへしよ。よ
人いかんとしてにひかんすとすととへよ
じほく人をもだす事かきともりかこう。おは
りり、さあへじとれもひづのゆらう。ま
さあへじ比巴ふくろてはひとのけえを
らも、まことひかうたむかうれ孝博信綱つれ
をうましかくまく院様の流桂のむ浦の經
信の孫也たゞくまハ經信の流ハ不やせよも
く。又たゞあもたゞくとせあくさく。な
ま孝博を比巴とハ夙夜御みくゆへししたの事

指されとくらまやへよ比巴の酒ひ中に周吉酒まよ
の酒ひおやみくらが放せとやま。かつてのをく
黄達調くわいのくわいへくわいはまのゆへえうあたま
くとすくわいはやから櫻合さくわいをくわい
へくわいへくわいへくわいは櫻合さくわいもまも酒さけ
酒さけをくわいへくわいへくわいは櫻合さくわいをくわい
よひをくわいへくわいはよひをくわいへくわい
秀潤しゆりんのよひをくわいへくわいはよひをくわいへくわい

はまきしれを性うへたる事くらえよせよ比巴川
もくかくでやどりく要に立てとみくありま
ハ云處の行遊の事つりばまゆく功を花ん
との儀のくわくしきひきのともも桂かくらの不作も
りそなうあはれにそよくとくら車うそくく
人のふとう角をゆめられよもうひてほ
らひてねも秘苑もくじれはくじあやこ
まくじろへくじ又あさくへくじを後まく
行をひやとあくとへんをじやくととももく
くじあくじほあまよとばく車

りとけをる人のようくあらもあくようあくくうこ
もあり又とくふもくひくねむくをくもくわ
にふきとまくともうけおおじてかくうひたうかく
ひくちやくまかきハクアランやうにうそとくめく
くうゆく又、あくに揆とくしていふとくとく
みちあゆにとくじ経緯をあくとくへくゆにまく
まくにやうのとくともく揆者も又志野くあり
うちあらうくとくよ早あらむくゆのモ性
みくうてくらうてすともううかまくとくもく

うりゆくらかくともあきらめりときたるじ
まろし又あらよたるじうじあがうらふ
くらばとたまうをとくうつゝしのとも
比ひれぞとくさうらうらうとくつゆもあ
くうりゆくらかくともあらうとくつゆもあ
わがくとくとてとあきとこせねの上にとく
く絆やをみとてうきとくかまとにねぐとす
りうじくらばうらうとくろえてばくしとく
わんふくやかみとてれとくとおおやく教ふ
まことうておくとくくえをとくと入角

まわああふ車ハギリとすをすれどハモリ
あくじ人のいとくへきにあくとくめ
ぬよわふすいわはねいとくとすれハカムキ
あと能くのむやとすれとくとくあらだ我
ふすくとあう車ととすに人のとくの車ハ
いきととすとくの車ととすに人のとくの車ハ
いとくととすとくの車ととすに人のとくの車ハ
いとくととすとくの車ととすに人のとくの車ハ

うちれセ郎とヤ比巴をバヒ巴よもじりと車の
御、さうあくしとこのえうとひきとくにばりて
我日とももゆくにまくにひめりかくじきと
かよ年ともどくにまくにせふたすらん車とく
きあやねとくもく人みかじとくもんへをま
だよをてもじてたゞハ現せよ益々利多の
をくくに御つてくわのちとおまぬりと
武者すこあるありけ半とゆく人ひ思もん
んあくとふくわとせん人也あともんじ
敵ハよらかきハトにひりとてひきあもん

見又日^金ノ^翁時をく年もえと御あきと
いきあくしじいがをとあくわねくわあくにせ
ねをあじんハ半とくとくとわのあたまハ時を
くくの年もくがやくみえくらくのハか
ト

身七調^{アラシ}がううとがくうとくよもまくまくへ一戻
ちあたちにとむのいとくたがくくくハヨウ^ア
それよきううとくとあく先とくとくとくとく足
とくとくとく律^{リズム}はくはくはくにつよを駆代信と
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

よりあら記略頃より下一種清還雙調平大同
音上黄鐘又云雙調平調上黃鐘下一種清還
雙調より六双調より平調より又曰平調より李上
元調より又曰上元調より黃鐘調より又曰黃鐘調
より下玄調より角下玄調より一絃調より角下
吉絃調より盤洪調より又曰種清調より又曰双調より
又曰角とありて名一うとうれ事より
うのうくじやをもともとくちぢみ位
ハアとねなりこみ中に雙調と平調とく門別
うく吉絃調と種清調と又うづりと又曰黃鐘調

と下無調也りとげかのくとこゑいといふう
くかにせとハ十二律とりよどくはくくらえ
てあらつてことあまつまくも女房のこゑのみ
まくじきうまくけとハくくくわく

半八樂れ男の支ニキハぬくも基政の假名目六
をとして能むれどとひわもひり又ぬる院に入ら後
のせきせおとくゆしたる樂れ目六をとひり
せんとくとてや角右樂射不しきせい送り調
ふれをといのとあり是れおひまうのとあるよお引

物よりうらへくわともうけの事こそみじめじ
にやくとあくもあきしもぬとをくじくわい
とてもかしらとあかりふばしととま
まつ筆初拍より筆を後筆筆をぬよて後
比巴ば引角には巴のらは筆すとあつて今す
せねいうも上う下らうといとこの定也引
れハ比巴入後を筆ハ引へ筆すもこと引よらうな
らしまつも引角筆すもこと引よらうな
どりれとよも、とてもうくさんとよも
あうそあきのやうも比巴もくわきて

うゆてあとびがるふとくともやさに樂ハ一
ちもほへあへ立候もおとこすととが上う
すくもかく又上手にもをこにひきかとより
てとおすくととのふとつさひくとせやす
くゆわくやくめう後又かく車多に比
筆をあおりうよとくせじと思おととふと
ちとやくはされうらぬとまくわくハカ
もゆもせりてハ一反もくもぬきて引船をせ
ふとハ興よ入あうのふとをかう比巴す筆を
りくかとにもかくにあう筆をよこれあ候

さうあつねを筆の引ぬとりかどよひあ
らそんしれをあまくも無よへてくわがへしく
あらゆるあくらか筆筆をひきほりうかる處
をきへ附へとしまくわよほきくろも行へとも
それもよもにどうのゆゑをくのんをひのゆゑを
ちかくひぬとすにてある處をにかんとやらる
うくわよや筆もじりへ吹ぬとすてももあ
まゆに見つけられかをあらとあそへりく
まくとせみあらはるう筆かじりりれば支
有房

ありまとういへんとまくとよきをかを云わを

あらえとく

第十九事記ふと調子のうづにをかくさとくぬ
きともおきをくかよへられみうちまつ十二筆より
きてやくも地のおりとにあう十二ありこれとくす
萬筆大族夷達活洗中呂莊賓林達夷別南呂
無付夷達とリ萬筆ハ一筆大族を平調大呂
一筆調平調のみのあら活洗ハ下無調夷達
と平調下先調のみのあら中呂雙調林達萬筆
達活南呂ハ蟹深調夷達と上先調大呂のみに
きたくはまくあもしれこゑれよくとかくよへ

主モ七音ニテハトトク宮商角徵羽変宮變徵也
一調子のうちに二つもあらず一絃調子ハ比巴比
双調ウソシ也ハ宮十ノハ商しセハ角也ハ變
徵一シハ徵工八ハ羽フヘハ變主又半調子ハ比巴の
变音調ハエクハ宮工七ハ高元ニハ角又上ハ變徵
セハ高音下ムハ羽十也ハ變宮也モハシハ
アラウ角也ハ比巴の調子也アモハシハ
アモアツト甲シミニナモヨハ高徵高羽角變主
變徵コリコリ名ハナモトアハ律ハ角變主變徵の
之ヲハ一律モナタクアリ十二律を甲シミニアハ

名ハ莫音林鐘大族南呂活潑商鐘蕤賓大呂夷則
夷達元符中呂モリクテ中呂モリク夷達ハ之也
アモアツト甲シモ律未アリテ彼の中モ呂
角也ナモヨハ調子の支音モトモアリヤツ能
シテノモナヘキト事ナリハ時一はま
トハ十二律ナモアリハ
ナモナホモ松モ角モ松ハトトクニヨモアリナモ
ナモナホモコトニ年、今ナホモトナヘモアリナモ
ナモナホモ比巴ヨハニ曲トナモナホモナモヒ革
ナモナホモ調子ナモアリハ

筆にいた食間のへ御筆筆者より小調手写より宝希院
徒師中尾席かとぞとせはかひれあうた樂傳馬
不争とすをかゆくめ更かきひそとよひて詠之
やめきともゆく細くの筆に秘とへま車おり
行うハ車のに傳あくよしく秘と角とお
かゆき又同ねかきとばねく今つたら秘と
ハキもねう筆のうもんとととととととと
解く秘とくとえまくさみゆきとせの中の秘と
まくとくとくとくとくとくとくとくとくと
きと残りもかゆくある舊合万枯葉かとも秘と

河内喜よやゆうゆうがのハヤシハつこじまく一けき
もくめい

第十一うくれぬひめのゆ紫の流ふあやくわう筆
ようちううう大津戸紹あ赤筆に豊原氏不争と
かくとく戸紹氏いまはかくとくとくにか利あ
人もとも舟ぬきうゆせんられ詔とハ詔よあ
ハキ又筆にハラがきく筆をすり比已筆より
あひら樂のたうりよひうたうよひて同かれ
のあひりあらハ一まふあくとハ因考洞のヒと七

せひにかまわう又一ニ上このまほらひうくうりか
るまい 又下也同ゆヒとセ上こおめ 幸又ヒセ
上ヒヒとねねじがねまもみをくへ承も父と
謂ゆあゆひうらひヨリ一セイアーベークもあく
くくうくうにきぬとまろ也谓とやんじいよまくに
どつきく謂く不れ後をじゆくてもうとあく
ぬもとまくたふやくにあくとも承後
かくくぬ也ういよくと待かきと女房をさあき
人をのあくにうこく又あくとれ吹わうく
ゆくはあくとをゆいてもう事くハ故ゆる

院の清ゆうれあくもくやむくおの上をまくも
中くあくのあぬゆうとまくからだとうも
佐^経
游^正まくわくじゆくやくじゆく人あくともく
まくともくが宅あまとよことゆもの上まくり
そそれへうふふをあえすとくとくとくとく
あともがもじとこくにけりやくとくとくとく
あくともくもまくとだくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
内才をもれゆもひう陪體をもくめはく相あゆき
あく相ゆくまた相あくとやくをまくとく

さとくとて兵士にて技南をとのやにてくとけ
あ徒らひはともくあらうらもとまほもかまくと
ゆりくまゆる角くい天生寺樂人かゆふじと
て公室う後どく義合之帖と二□さう車あり
あすすすはねおよきとおよき拍手とれあらひくのつる也
揚高標もけろ車うまく轍尾公後とて月晦入
道敵下作らきくらめもくととととすみのうり
とそつとくとて社大寺左近公後^マう終しゆす
却くとハヘ内敵不せれきすとととちも敵奉
きくれり也祕坐かくわくうまくせうへりく

船とやあ車うそ承ときたまとまう車もやあく車
らじよ本つううとえあひ人のせじ半れもくう
あひくんと左おとくくめんたうひくうをくま
ほきくれあひとあきハ一もんちとくくくくく
入のあく車にときたら半もしあくん又一もんわ
うもくたうやうれあくにけひまう車をくそくお
せんえくくくとだくじよつあとで解く用をあは
せ十二あわの車うらね乍とこの初よのこれ
不弱破大鼓征鼓一鼓之鼓寔妻大拍子洞拍子
反対易拍子方聲だからうもくにまくまく

たゞ一方聲ハ大鼓鶴鼓の定とお極とへやもす
まいりにひりとへのてゑありはれを付經砂を邊處
常響と鶴声小鶴声は小鳥聲式白水声とある事アマヤリ
白世声アマセシもあり是ら聲アマシナたかひの事アマシナ多
きとも、またりつと人アマシナれましに、織部アマシナこれら
かくゆきアマシナはうこの席アマシナいおやう別の邊より
里アマシナもやさ声アマシナのあ五 萩合アマシナ帖アマシナ奥春莺アマシナ鷗アマシナ鳥アマシナ宣事アマシナ破
帖アマシナあり織錦聲アマシナもよきにあり大鶴聲アマシナハ模合席アマシナ
一帖アマシナには小鶴声アマシナへゑより象アマシナ声アマシナハ破アマシナ有
角聲アマシナ邊声アマシナりアマシナといつアマシナもたらアマシナのとアマシナもす

レとすねとせかくまうとまうあめうお極とみねうと
よつ坐アマシナてアマシナへアマシナとアマシナハ抱アマシナかれ物アマシナもを坐アマシナうひ
あくアマシナにアマシナあアマシナあアマシナ又アマシナはアマシナおアマシナものアマシナひアマシナうアマシナにアマシナわ
り又アマシナせんせらうアマシナうアマシナやアマシナ、女房アマシナもアマシナうアマシナみアマシナ、
やアマシナとアマシナたアマシナうアマシナにアマシナうアマシナひアマシナてアマシナおアマシナあアマシナきアマシナもアマシナうアマシナうアマシナ
もアマシナたアマシナ抱アマシナかアマシナくアマシナとアマシナあアマシナこアマシナ人アマシナもアマシナはアマシナ
アマシナれアマシナ大鼓アマシナのアマシナるアマシナ、
亦アマシナのアマシナ右樂アマシナ羽樂アマシナ大曲アマシナ中曲アマシナ小曲アマシナ聲アマシナ廉機アマシナ荒聲アマシナ聲アマシナ真アマシナ
音アマシナ序アマシナ安聲アマシナ聲アマシナとアマシナうアマシナうアマシナくアマシナへアマシナ鶴
鼓アマシナ新聲アマシナしアマシナうアマシナにアマシナあアマシナ也アマシナ大鼓アマシナくアマシナうアマシナうアマシナくアマシナへアマシナ鶴
じアマシナとアマシナおアマシナうアマシナひアマシナあアマシナえアマシナうアマシナかアマシナうアマシナうアマシナくアマシナへアマシナ鶴

文房は身ゆどそへまじまうかうせんくや角
ふくにハラリあくとや新樂ふ三度拘るにあく
見よハ八拘のれの一つもよどうせぬ也ハ拘
拘とを不に二度拘子にあく年、あきとも新樂と、
三度拘のれのめ、但參焉算にひきもすを窮人も
ことつこととく時新樂とも古事よりあつ様事む
ハ古樂かれも三度拘子りハ老鳥とあいやうと
かくのめううのうこうに拘かねる一拘に
あくちに三度拘にあくもれあくとれはんとくの猶
三度拘の是拘ゆかとこおつ

宋十三樂器なり新樂よハ八のしがあく全名絲絃
匏古草木亦全のうちじ又そくかれもあり今ハ世よ
たくするわともかきハかよとのとえとくいとく
を爲す角一よそ鐘二よそ鼓三よそ笙四よそ簫
五よそ箏六よそ箏七よそ箏八よそ箏九よそ箏
十よそ箏十一よそ箏十二よそ箏十三よそ箏
文よハ褐色をもつてのり、またやかくとねうとつ
さはらぬとだらやうとつて見ふ色もあくとくを

達れが眞云傳養にうつねうじりのあら
その文字を同取かきてよしとあひゆせられたるを
とくじゆくはてはお全くまんざくもとあら
考るやまといつくすをよハ譯毛又たかすと
鶴と角やうにあけりよや唐邊の傳ふの初葉
とあきのれぞにあいことうつうじりなりとある
くわすれどもとよひつとてた鶴と角やうにつのそ
なむひあとせられてたかうとよ車もゆき
けり車れいとよよるよハ去撰あくへいよ車もゆきす
あのとく去撰かとあかくとありてよハ琴たゞ

今とくあすくうくわうて絃セモウラウリシムと
らに周文王一翁武王卒ともくらいじきセモウラク
文の絃武の弦ともよがまが高とも、あくやまに
てもひづと琴あきやうくうう絃の數サムみ
き八尺をす又ハ絃サムも又ハ十トドも又アタマと
と原うとせてもりくまくしてあくねーども
筆これちずくー印シテかーとふ戸絃十トドを
半文よハひりとられとあるすかとあんうとこハ
いつうあくたるやにあらうかによ此已もとハ

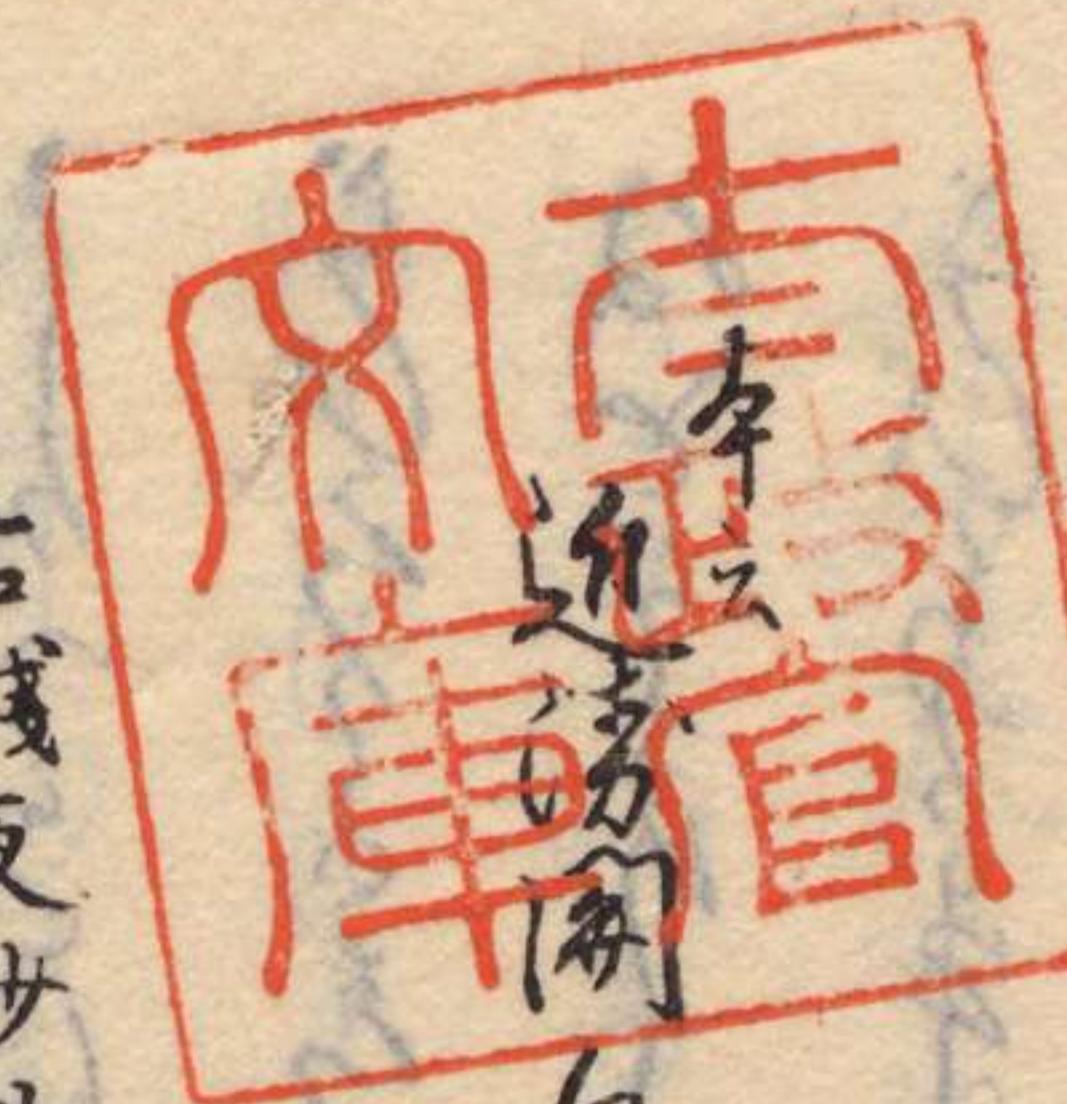
今すと申すにとよもとあれば人あれハ多きもかまこと
あすともうと申すにとよもとあれば堂儀も又つともう
じうへつにとよもとあれば御内侍も又つともう
ハ虎と云ふあるとあつてよハ室もあつてあんりうう
あらゆと云ふとよもとあはれよとじと備ニテシカ
はよハ箭又云きおとよもとたるあめあよことく
今うへとよもとあもとをもじて経あくは
袖よ五うハ箭あきよかくやあくをうきてもくも
くせんぬくよハ箭あきよかくひの筆とぞ見
くわくわくのよひのよひや地出のをけくも

ねあくよまハ本よりくわくわくよハ筆もさうせん
かえていれわわあみだりよハ筆これ又あうてのゆ
書管官在を内くや玉一よハ墻つまれやうから相
二れつとよハ筆とやうかく二よハ筆やえよ
毛筆あくう縫又あくじよハ革一にハつと二ふ
ち韓あきもつとやうかく數あくうううよハ鞞こ
きもつととよせんきとハを拘れてひたれり
かつてからと木一よハ稅数これ又きとた
まとて相手のうのあつ二にち相手とみそれくら
ひとえもくじあつてよの筆だらうとくわ

いとうぬのやせはまうか とよハ腰もき又同支
空よハ無されもまよと手文よハあくと六人をすまゆ
有推主くみゆく雅あきもあくやうたくらゆ
とあがく あくに有推主をりまくらゆ
のうちたらあらのつづたらめきハヤくつよをも
んことのあくとあふうらにえう全あれハくら
けくセキとあはきうれの思くくくやもんよつ
る車うる角のちほのえおとおりあくうかね
角虫損 けくまん車とかよのひとも
よしのうれ車をうるまにこの下りやくと

ワタリとそよばとそようかくがやまゆゆと
あくぬういととどくしこれあよとくはだきも
しりつにじよハカくわくほんかぬ車とりの
じひくもとぬうらかくはなとひくとものゆくと
ぬとくとくにまくとて是とくと人よさうとくと人
うひあゆ車とじくよもじくよをハ人もにぐく
足とくもくとくとくとくとくとくとくとくと
うくわくとくとくとくとくとくとくとくとくと
うくわくとくとくとくとくとくとくとくとくと
うくわくとくとくとくとくとくとくとくとくと

娘のうりんすじくちとけく。あひ落へてかまく
女房はかひゆん車などにあひてあらまへ
らじ車と被ふるよ入りしれはアモロウ 滅
あゆういひとよ



本
近
古
文
庫

右残夜抄以一本收合了

羣書類後卷第三百三十七

